

## 生誕150年 “管弦楽の魔術師 モーリス・ラヴェル” 第1回

### プログラム

今年、20世紀初頭、ドビュッシーと並んで、フランス音楽の黄金時代を開花させた大作曲家、モーリス・ラヴェルの生誕150年に当たります。そこで2回にわたって名曲の数々を聴きながら、ラヴェルの魅力に迫りたいと思います。モーリス・ラヴェルは、1875年3月7日、フランスの西南部スペインの国境に近いシブールに生まれました。著名な技師で音楽愛好家であった父は、彼を音楽家に育てたいと考え、7歳からピアノを始めさせました。1889年、14歳でパリ音楽学院に入学し、ピアノを専攻。1897年、22歳のときから対位法をジェダルジュ、作曲をフォーレに学びました。1893年に最初の作品である「グロテスクなセレナード」、1895年には「古風なメヌエット」、1899年には「亡き王女のためのパヴァーヌ」などのピアノ曲を作曲。フォーレをはじめ、ラヴェルの才能を高く買う人たちは多くいましたが、批評家たちからは認められず、コンクールでも、異端的な音楽の意見を持った注意人物とされ、彼の作品の優秀さを認めながらも、審査員のほとんどは不公平な態度に徹していました。これが世論の反感を買い、やがてパリ音楽院長のほか数名の教授の辞職問題にまで発展、いわゆる「ラヴェル事件」を引き起こしました。その後1902年から03年にかけて作曲され、フォーレに捧げられた弦楽四重奏曲によって、ラヴェルはフランス第一流の音楽家の地位を確立しました。第1回はチェコ出身の名指揮者マルティン・トウルノフスキー（1928～2021）指揮による組曲「マ・メール・ロワ」、早すぎる死が惜まれるイタリア系スイス出身の名指揮者マルチェッロ・ヴィオッティ（1954～2005）指揮による「5つのオーケストラ付き合唱曲」、ヴァイオリン界の女王アンネ・ゾフィー・ムター（1963～）とイギリスの名指揮者サイモン・ラトル（1955～）指揮による「ツイガース」、後半はオーストリア出身の名指揮者エーリッヒ・ラインスドルフ（1912～1993）指揮による「ラ・ヴァルス」、最高のラヴェル弾きと言われた巨匠ヴラド・ペルルミュテール（1904～2002）が来日してジョセフ・ローゼンストック（1895～1985）指揮N響と共演した左手のためのピアノ協奏曲、そしてフランスの名匠ジャン・フルネ（1913～2008）の指揮するバレエ音楽「ダフニスとクロエ」第2組曲をお聴きください。

\*\*\*\*\*

#### モーリス・ラヴェル（1875～1937）：

##### 組曲「マ・メール・ロワ」

マルティン・トウルノフスキー指揮プラハ交響楽団  
（1994.5.27 ドヴォルザークホールでのLive）

##### 5つのオーケストラ付き合唱曲

1. すべては光なり 2. 夜 3. 舞姫 4. プロヴァンスの朝 5. あけぼの

マルチェッロ・ヴィオッティ指揮ザールブリュッケン放送交響楽団/エヴァ・マリア・ホルツ（ソプラノ）  
ビンチエンツォ・リローサ（テノール）/ザールランド・ミュージック・ホップシューレ合唱団  
（1993.6.27 ザールブリュッケン、コンGRESハレ大ホールでのLive）

##### ツイガースーヴァイオリンと管弦楽のための演奏会用狂詩曲

アンネ・ゾフィー・ムター（ヴァイオリン）  
サイモン・ラトル指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団  
（2015.12.31 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive）

\*\*\* 休憩 \*\*\*

##### ラ・ヴァルスー管弦楽のための舞踊詩

エーリッヒ・ラインスドルフ指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団  
（1989.10.10 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive）

##### 左手のためのピアノ協奏曲ニ長調

ヴラド・ペルルミュテール（ピアノ）  
ジョセフ・ローゼンストック指揮NHK交響楽団  
（1972.11.21 東京文化会館大ホールでのLive）

##### バレエ音楽「ダフニスとクロエ」第2組曲

ジャン・フルネ指揮ザールブリュッケン放送交響楽団  
（1990.3.4 ザールブリュッケン、コンGRESハレ大ホールでのLive）

# 曲 目 解 説

## ラヴェル：組曲 “マ・メール・ロワ”

ラヴェルは1908年、32歳の時に、彼の親しい友人であった画家ゴデブスキ夫妻の子供ミコとジャンのためにピアノ四手連弾のための「マサーグース」を意味する「マ・メール・ロワ」を作曲しました。直訳すると「が鳥のお母さん」となりますが、曲は17世紀フランスの詩人・童話作家シャルル・ペローの童話集とドルノワ子爵夫人やド・ボーモン公爵夫人のお伽話を題材にしています。1911年、ラヴェルはこれを管弦楽用に編曲、さらに1912年には、テアトル・デサールの支配人、ジャック・ルーシェからの依頼により、バレエ音楽用に編曲するため、「前奏曲、紡ぎ車の踊りと情景」および四つの「間奏曲」を新しく書き足しました。1912年1月28日に初演されましたが、評判は今一つで、結局オリジナルのピアノ四手曲による5曲だけが、管弦楽組曲として知れ渡りました。洗練された管弦楽法の極致とも言うべき名曲です。

1. 眠れる森の美女のパヴァーヌ
2. おやゆび小僧
3. バゴダの女王レドロネット
4. 美女と野獣の対話
5. 妖精の園

## ラヴェル：5つのオーケストラ付合唱曲

ラヴェルは、自分の作品を批評家に認めさせようと、当時作曲家への登竜門とされていた「ローマ大賞」に盛んに挑戦していました。「5つのオーケストラ付合唱曲」はいずれも1900年から1905年までに作曲され、ローマ大賞の予選課題曲に応募した作品で、「すべては光なり」、「夜」、「プロヴァンスの朝」は予選を通過したものの、大賞には至らず、曲は1910年にまとめて出版されました。どの曲も瑞々しく、美しい和声を施した声楽小品で、精緻な管弦楽法もこの頃から芽生えていたと予感させるほど魅力に溢れています。

1. すべては光なり（1901年作曲。風光明媚を賞賛する平凡な歌詞ながら、舟歌風の官能的な美しさと豊かさを持つ小品）
2. 夜（1902年作曲。夜の海辺の情景を静かに瞑想しながら歌われる）
3. 舞姫（1900年作曲。可憐な踊り子の様子を描いた、フリギア旋法を用いたスペイン風の舞曲）
4. プロヴァンスの朝（1903年作曲。プロヴァンスの情景を描いた平凡な歌詞ながら、明るくすがすがしい気分を満たした佳曲）
5. あけぼの（曙）（1905年作曲。ローマ大賞応募作最後の作品で、洗練された精度の高い佳曲）

## ラヴェル：ツイガースー ヴァイオリンと管弦楽のための演奏会用狂詩曲

「ツイガースー」は、フランス語で「ジブシー」を意味しますが、1922年、演奏旅行でロンドンを訪れたラヴェルは、ある演奏会でハンガリーのヴァイオリニスト、イエリー・ダラーニの演奏を聴きました。ラヴェルはダラーニにロマの音楽をリクエストすると、これにこたえたダラーニに、さらに次々と演奏を求めました。すっかり聴きほれてしまったラヴェルは、これをきっかけにダラーニのために新作を構想し、曲は1924年に完成、同じ年の4月26日にロンドンのエオリアン・ホールで、献呈されたダラーニの独奏で初演され、大成功を収めました。すぐにピアノパートを管弦楽用に編曲したバージョンも作られ、今日では双方で盛んに演奏されている名曲です。作品は「ラッサン」というテンポの遅い部分と、「フリスカ」という情熱的で速い後半部分からなる「チャルダッシュ」というジブシーの舞曲の様式に基づいて書かれています。無伴奏ヴァイオリンのエキゾチックなカデンツァから始まり、圧倒的な名人芸を披露するクライマックスへの緻密な構成力には高い芸術性を感じます。

## ラヴェル：ラ・ヴァルスー 管弦楽のための舞踊詩

ラヴェルは、1906年頃から、ヨハン・シュトラウス讃として「ウィーン」という交響詩の構想をあたためていましたが、そんな最中、1917年にロシア・バレエ団の主宰者ディアギレフからバレエ曲の作曲依頼を受けました。曲は1919年から1920年にかけて完成、交響詩「ウィーン」の構想は、「ラ・ヴァルス」（英語では、ずばり、「サ・ワルツ」）という作品となりました。しかし曲を聴いたディアギレフは、曲の良さは認めたものの、バレエには不向き、として断りました。2台のピアノによる版もありますが、管弦楽版は1920年12月12日、シュヴァイヤール指揮ラムール管弦楽団によって初演されました。スコアにラヴェルは以下のような短文を印刷させています。「渦まき雲が、切れ目を通して、円舞曲を踊る何組かをかいま見させる。雲はしだいに晴れてゆき、旋回する大勢の人でいっぱいな大広間が見えてくる。舞台は次第に明るくなる。シャンデリアの光はフォルティッシモで輝きわたる。1855年ごろの皇帝の宮廷」。退廃的な色彩に富んだ傑作です。

## ラヴェル：左手のためのピアノ協奏曲二長調（単一楽章）

ラヴェルは、第一次世界大戦で右手を失ったピアニスト、パウル・ヴィトゲンシュタインの依頼を受け、左手のためのピアノ協奏曲を作曲しました。作曲は1929年冬に始められ、1930年秋に完成、1931年11月27日にヴィトゲンシュタインのピアノ、ロベルト・ヘーガーの指揮によりウィーンで初演されました。作品は両手の技巧にも劣らないほどの難曲で、ヴィトゲンシュタインは楽譜通りに弾き切れず、手を加えたため、楽譜通り演奏されたのは、ジャック・フェヴリエの独奏による1933年パリでの再演の時が初めてでした。この頃、同時進行で書かれていたト長調のピアノ協奏曲とは対照的に、荘重で悲劇的な色彩を持った名曲です。

## ラヴェル：バレエ音楽 “ダフニスとクロエ” 第2組曲

ロシア・バレエ団の主宰者ディアギレフからの依頼により、1912年に完成したのが、バレエ音楽「ダフニスとクロエ」です。これは古代ギリシャ神話からとられたもので、羊飼いのダフニスとその恋人クロエの恋愛物語です。初演は1912年6月8日にパリのシャトレ座で行なわれ、華麗な演技やラヴェルの音楽が高く評価され、大成功を収めました。バレエ音楽は一幕3場から成り、混声合唱を含む大編成の管弦楽曲ですが、ラヴェルは、他に1911年に全曲を初演する前に第1場の後半から第2場前半にかけての音楽を抜き出した「第1組曲」を出版、1913年に第3場をほぼそのまま抜きだした「第2組曲」を出版しました。今日では全曲よりも「第2組曲」が広く親しまれ、ポピュラーなレパートリーとなりました。ラヴェルの最高傑作の一つです。

1. 夜明け
2. 無言劇
3. 全員の踊り